

○蚕養育手鑑自序

夫養<sub>レ</sub>蚕事ハ、天竺にて仏菩薩の初させ給ひて、唐土にもつたハれりと云り、我朝にても、神代より有<sub>レ</sub>之敷、先代旧事本紀五<sub>ノ</sub>十八ノ卷ニ曰、以<sub>二</sub>天殊棟命姉<sub>一</sub>見屋根命ハ天照太神<sub>ノ</sub>天市千魂姫命<sub>一</sub>定<sub>二</sub>天<sub>一</sub>養媛<sub>一</sub>、乃<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>桑蚕<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>御衣宝<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>天豊岡<sub>一</sub>、植<sub>レ</sub>桑令<sub>レ</sub>養云々、其後<sub>一</sub>人皇三十二代用明天皇の皇子聖徳太子、民の寒苦を思し召<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>蚕事を教給ふよし、旧事本紀に委、それより次第に繁昌し、<sub>レ</sub>国々に専<sub>レ</sub>之、賢よりかしこきにつたへ、或積<sub>二</sub>聚斂<sub>一</sub>の功、見聞儀<sub>一</sub>を以蚕の情をためし、是非得失の理を済したる人<sub>一</sub>おほしといへども、世に教をなすべき時節未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之か、我<sub>一</sub>此理を漸に得るといへども、本より愚暗の身なれば、人<sub>一</sub>信用しがたし、唯子孫にしらしめんため、他の嘲をも不<sub>レ</sub>恥、「書記之一帖として、号<sub>二</sub>蚕養育手鑑<sub>一</sub>、文字の誤、文のつた」なき事ハ、我文盲の身なればなり、たとひ此書を常に不<sub>二</sub>誦覚<sub>一</sub>とも、蚕の出る時節にハ取出し、時々剋々に見て、書のごとくする時ハ、「仕損ずる事あらじ、一夜の内にも陽気変化ある事に心を付べし、」惣じて養蚕の失ハ心づきなく、油断より起る也

○蚕養育手鑑目録

第一 序論の事

第二 蚕種調置やうの事

第三 蚕可<sub>レ</sub>出まへ煤掃の事 附、禁物

第四 蚕の道具 附、蚕にて富貴に成たる物語

第五 蚕はきおろしの事

第六 獅子休の事 附、寒風を凌たる物語

第七 竹休の事

第八 舟休の事 附、暑気凌たる物語

第九 庭休の事

第十 上りまへの事 附、暑気を扇にてあをぎたる物語

第十一 まぶしの事 附、霖雨南風凌たる物がたり

○第一序論

太子の旧事本紀ニ曰、麻ハ布を生じて下臈の膚をかくす、桑ハ絹を生<sub>レ</sub>じて上人の膚をかくすといへ共、蚕によらずんば絹生じがたしと云々、抑<sub>二</sub>蚕<sub>一</sub>の初ハ日本紀云、天照太神いまだ御出現なきまへに、保生命の人間出<sub>レ</sub>生して、はたへをかくし、あたゝむる事成がたからん事を憐<sub>レ</sub>給ひて、化虫と<sub>レ</sub>ならせ給ひ、養蚕の法を教させ給ふと云り、天竺にてハ馬鳴菩薩の<sub>一</sub>衆生を憐<sub>レ</sub>給ひて、蚕虫と現<sub>レ</sub>させ給ふ、唐土にても高辛子の代に蜀<sub>一</sub>国にて、女人化して蚕となるよし、此外、因縁書に蚕の由来委ありといへども、いまだ本書を見ず、故に究て例証にひく事あたはず、しかれども、「いづれも仏菩薩のあたへ給ふ所なり、蚕四度の休ハ、仏に有<sub>レ</sub>則バ常樂<sub>一</sub>」我請、天に有<sub>レ</sub>則バ元亨利貞、人に有<sub>レ</sub>則バ仁義礼智、身にとりてハ地水火風の四大也、又養人に対してハ、生住異滅の理をしらせ、三世を顧す<sub>二</sub>名虫也<sub>一</sub>、三世と者、種ハ過去也、蚕ハ現在、繭ハ未来の果也、過去の<sub>一</sub>あしき蚕は必現在悪し、過去のよき蚕ハ現在にて養育たゞしく<sub>一</sub>する時ハ、未来にてハそれ<sub>一</sub>に随て恩報の果を作る、又、現在にて養<sub>レ</sub>育たゞしからずして、蚕に諸の病出る時ハ、果を作る事思ひもよらず、「終に滅する也、養人はをつゝしまずんば有<sub>レ</sub>べからず、蚕の一生ハ<sub>一</sub>全人間<sub>一</sub>一代の行也、正に仏菩薩ハ蚕と生を現<sub>レ</sub>させ給ひても、儒・仏・神の三<sub>一</sub>」道を教させ給ふハ、誠に有<sub>レ</sub>がたき次第也、人として是をしらずんば有<sub>レ</sub>べからず、「かほど尊<sub>レ</sub>虫をおろそかにする時ハ、養はつすのミならず、却て、天の御にく<sub>一</sub>しミあらんや、又富貴なる人ハ事しげきゆへに、蚕に疎なるも尤<sub>一</sub>也、然<sub>レ</sub>といへ共、道にあたらず、たとひ金銀にハふそくなしとも、道を思ひ儀を慮て、「是を養におみてハ、随分に心を尽し、初より終迄念を入、つめ十分に仕<sub>一</sub>」おふする時ハ、徳用のミにあらず、仏菩薩の御憐も深からんや、養人常に午の日を祝ひ、蚕神を敬ふべし

(後略)